

地域住民の QOL

～福岡県朝倉郡筑前町の場合～

Quality of Life of the Local population

～ A Case Study at Asakuragun Chikuzenmachi, Fukuoka Prefecture ～

中村学園大学 流通科学部

音 成 陽 子

I. はじめに

1. QOL (Quality of Life : 以下、QOL) とは

QOL は生活の質、人生の質ともいわれる概念である。WHO において QOL は「個人が生活する文化や価値観の中で、目標や期待、基準および関心に関わる自分自身の人生の状況についての認識である。」と定義している。WHO の定義では QOL は 身体面 (体調、体力、疲労)、心理面 (前向きな気持ち)、自立の程度 (可動性)、社会的つながり (人間関係、社会的支援)、環境面 (地域の特徴、交通アクセス)、個人の信条や心の持ち方 (生きる意志、価値観、期待、関心) の 6 つの側面を持つとされている。これらのことは、QOL が個人のあり方だけでなく、広範囲な要因との関わり方にまでおよぶ複雑な概念であるといえる。加えて、QOL は WHO の「健康とは、身体的、精神的ならびに社会的に完全に良好な状態であり、単に病気が虚弱でないことに留まるものではない。到達しうる最高度の健康を享受することは、人種、宗教、政治的信念、社会・経済的条件の如何にかかわらず、全ての人類の基本的権利のひとつである。」という健康の定義とも相通じるものとなっている。したがって、健康で豊かな生活を送るためには QOL の向上、あるいはできるだけ高い状態で維持することが重要といえる。そこで、本調査の目的は、福岡県朝倉郡筑前町「食と健康と町づくりの研修会」

に参加した住民の QOL の実態を明らかにするものである。

2. 筑前町について

福岡県朝倉郡筑前町は、平成17年に旧夜須町と旧三輪町が合併して誕生した。福岡県の筑紫平野の北部、福岡市の南東約25km、久留米市の北東約20kmに位置している。このように福岡都市圏、あるいは久留米広域圏に近接していることから通勤や通学が可能な地域となっている。

1) 人口

平成22年国勢調査時の筑前町の人口は29,155人となっている。平成17年国勢調査時の人口は29,353人、平成24年6月30日時点では29,253人となっており、微増減するものの大きな増減はみられない。15歳以下の人口は約4,000人で全体の14.0%を占め、65歳以上の人口は約7,000人で全体の23.6%を占めている。ちなみに、平成22年国勢調査時の高齢化率(総人口に占める65歳以上人口)は全国23.0%となっており、筑前町の高齢化率が特に高いとはいえない。福岡県内60市町村でみると、筑前町は31番目となり、高齢化率が特に高い地域ではないといえる。

一般世帯(9,279世帯)に占める3世代世帯(1,462世帯)の割合は、全国7.1%に対し筑前

町15.8%と約2倍の割合となる。また、一般世帯に占める高齢者のみの世帯（高齢単身者世帯および高齢夫婦世帯）は全国19.4%に対し、筑前町17.1%と少ない。福岡県内60市町村でみると、筑前町は36番目の値となっている。

2) 産業

筑紫平野は米・麦・大豆を中心とした農業地帯であり、筑前町の主な産業は農業とである。特産品はイチゴ、大豆、自然薯、ナシなどである。これらの特産品やその加工品などは出荷される以外に農産物直売所である筑前町ファーマーズマーケット「みなみの里」、農産物直売所「いちご」、旬菜ひろば「とまと」、ひまわり市場、じょんやま市場の5か所で取り扱われ、生産者が直接、消費者へ販売している。これらの農産物直売所では旬の果物や野菜、加工品が生産者のみえる安心、直接販売による安価なことから町外からの消費者を呼び込み、重要な観光資源にもなっているようである。

また、筑前町には農産物以外にも生活雑器である安野焼、福岡市の博多地区の特産でもある絹織物の博多織が生産されており、これらが特産品となっている。

3) まちづくり

筑前町は2005年3月22日に旧夜須町と旧三輪町の合併によって誕生している。この合併を機会に町政は「住み良い町から、住みたい町へ。さらに住み続けたい町へ。」の実現に向けて、以下のようなまちづくりを推進している。

- ・いのち輝く人権尊重の精神が行き届いた住み良いまちづくり推進
- ・生活に暮らしにとって安心できる安全なまちづくり推進
- ・ぬくもりのある 支え合う・住み良いまちづくり推進
- ・生活に魅力ある住み良いまちづくり推進
- ・男女共同により元気な活力のある住み良い

まちづくり

さらに、2009年には町民憲章を定めた。豊かな自然、伝統や文化、命の尊重、協働する意識、子育て、健康と活気のあるまちづくりという7項目を掲げている。

II. 調査の方法

1. 対象と調査方法

調査対象者は筑前町「食と健康と町づくりの研修会【ながら運動で健康アップ!】」の参加者28名（男性10名、女性16名、無回答2名）であった。参加者の属性は表1のとおりである。対象者にはすべてのデータは数値化されること、個人が特定されないことなどを了承のうえで回答してもらった。

研修会は筑前町にあるコスモスプラザ会議室にて平成24年6月9日（土）15時より16時15分まで行われ、調査は終了時に行った。

2. 調査の内容と分析方法

本調査において生活の質を主観的満足度の視点からQOLを検討するため、WHOQOL26を用いて行った。WHOQOL26は中根ら（1999）によってその平均QOL値が地域、性別には明らかな差異はなく、年齢では若年者（30歳代）より高齢者（60歳以上）で高値を示すパターンがあることがわかっている。あわせて、WHOQOL26の信頼性および妥当性は検証されている。そこで、中根ら（1999）の結果と比較することで、筑前町の住民のQOLを検討することとした。

WHOQOL26は身体的領域、心理的領域、社会的関係、環境の4つの要因とQOL全体について26項目を問うものである。調査票は自己評価式で、質問項目はあくまでも主観的に判断され、その回答は1（まったくない、非常に悪い）から5（非常にある、非常によい）までの5段階の反応尺度となっている。採点は1を1点、2を2点、3を3点、4を4点、5を5点とする。

表 1 性別・年齢・職業 (単位:人)

	男 性					女 性					無回答		計
	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳以上	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳以上	50歳代	60歳以上	
農業	-	-	-	-	-	-	-	-	1	6	-	-	7
会社員	-	-	-	2	-	1	-	-	-	-	-	-	3
自営業	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1
団体職員	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1
公務員	1	3	-	-	-	1	1	-	1	-	1	-	8
パート	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
その他	1	-	-	-	1	-	-	-	-	5	-	1	8
計	2	3	-	2	3	2	1	-	2	11	1	1	28

ただし、Q3、Q4、Q26は点数を反転させて採点を行う。これらのデータをもとに『WHOQOL 26手引き 改訂版』により QOL 評価を行った。評価は値が高いほど、良好であることを示している。

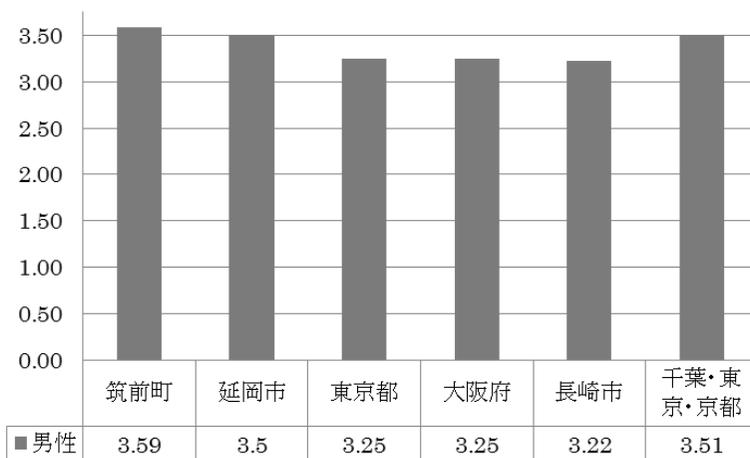
すべてのデータ分析は SAS Institute ジャパン社の統計ソフト JMP10を用いて行った。なお、本調査のデータは研修会の参加者ということで、筑前町全体を示したものではない。加えて、イベントの参加者であったためサンプル数が十分でないこと、健康に興味・関心のある

集団であることを断っておく。

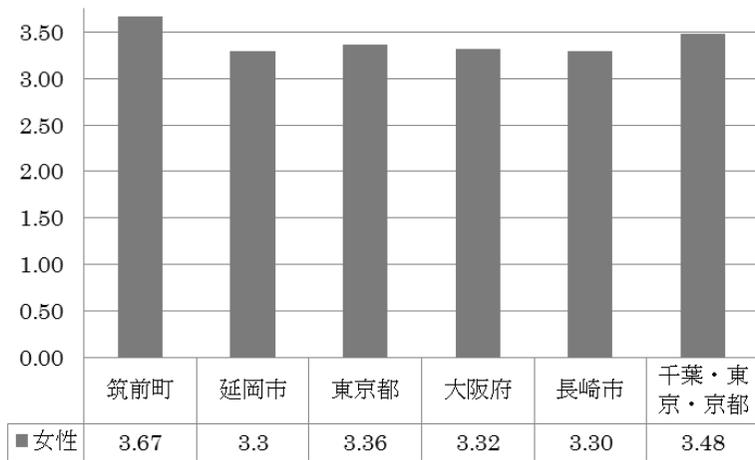
Ⅲ. 結果と考察

1. 全体的な QOL

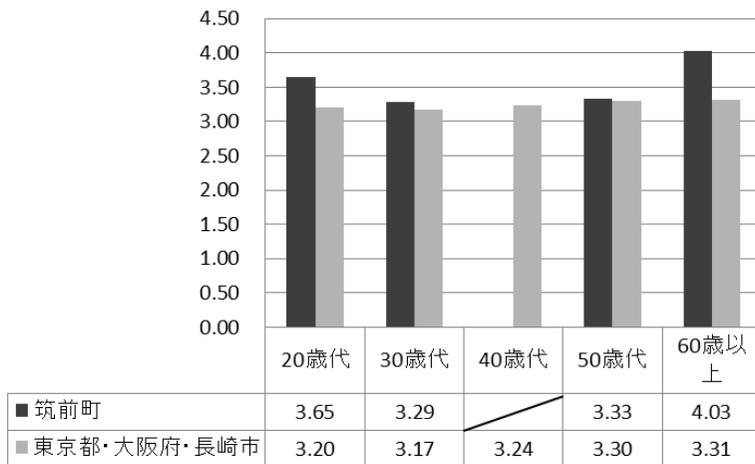
本研究の対象者の QOL 得点の全体平均は 3.60 ± 0.40 であり、中根ら (1999) による一般成人 (東京都、大阪府、長崎市住民) の平均 3.29 ± 0.46 と比較すると良好な状態にあるという結果が得られた。さらに、斉藤ら (2006) による千葉市・東京都江東区・京都府宮津市の住民の平均 3.49 ± 0.47 、樋口ら (2007) による延



図表 1 男性の QOL 平均値



図表 2 女性の QOL 平均値



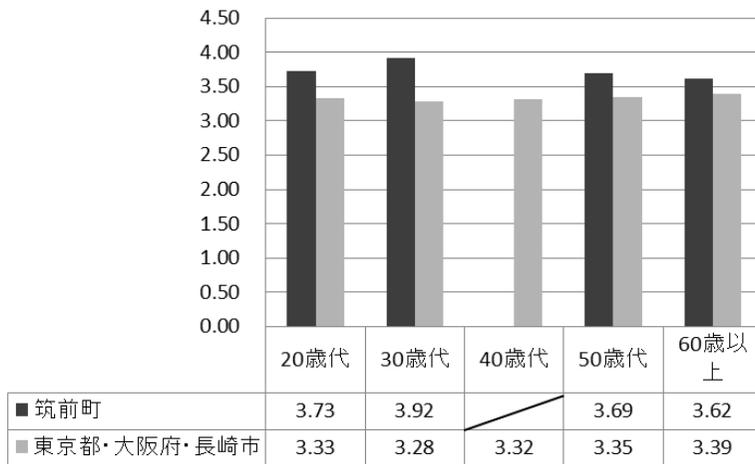
図表 3 男性の年代別 QOL 平均値

岡市およびその近郊住民の平均 3.4 ± 0.3 これらの先行研究の地域と性別で比較しても男性（図表 1）、女性（図表 2）ともに良好な状態であることがわかった。年齢別では中根ら（1999）と比較し、いずれの性・年齢別にみても本研究の対象者の QOL は良好であることがわかった。（図表 3 および図表 4）

Q1は全体的な QOL の認識を尋ねた項目となっている。筑前町住民の平均値は 3.26 ± 0.66 であ

り、中根ら（1999）の 3.18 ± 0.72 よりも良好な結果となった。さらに、Q2は対象者の健康状態の認識を尋ねた項目となっており、本研究の対象者の平均値は 3.29 ± 0.71 であり、中根ら（1999）の 3.03 ± 0.71 よりも良好であることがわかった。

これらのことから、全体的な QOL、健康状態はその認識も含めて本研究の対象者は良い状況にあるといえる。



図表 4 女性の年代別 QOL 平均値

2. 身体的領域 (Q3、Q4、Q10、Q15、Q16、Q17、Q18)

身体的領域の平均値は 3.60 ± 0.62 であり、各年齢の平均値は図表 5 および図表 6 のとおりである。特に、20歳代および60歳以上では男女ともに良好な結果を得ることができた。しかしながら、30歳代の男性、50歳代の男女で中根ら(1999)の値を下回っていた。

各質問項目をみてみると、Q3、Q4、Q15で中根ら(1999)の値を下回っていることがわかった。これらはそれぞれ痛みや不快感、医薬品や医療への依存、移動能力を問う項目であり、以下の4点から検討することができるだろう。

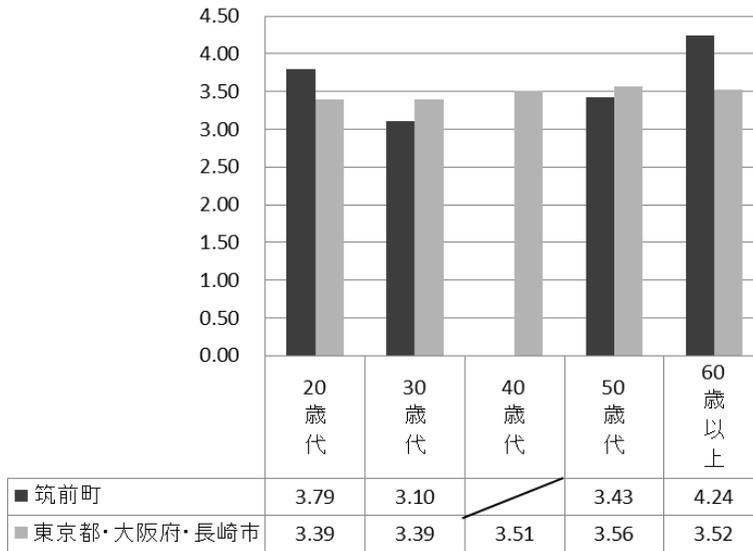
第1に文部科学省による体力・運動能力の結果からみて、体力は男女ともに20歳以降は加齢に伴う低下を傾向を示すということである。それは、成人男女の多くは体力のピーク期を過ぎ、低下、あるいは、維持している状況にあることを示している。

第2に厚生労働省の国民医療費の内訳によると、50歳以降は循環器や消化器などの内臓、筋肉や関節などの筋骨格系や結合組織の診療が大きく増加する。つまり、50歳以上の者は、医療機関を利用する機会が多いことが推察される。

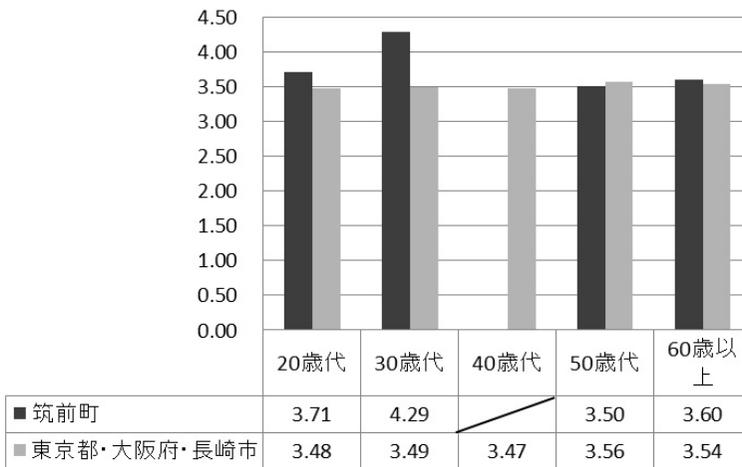
第3に田村(2011)によれば、農村部では公共交通機関が都市部に比べて十分でないこと、私的交通手段(自家用車、自転車、バイクなど)が日常の生活交通として成り立っているという。金子(2006)は生きがい活動を行う高齢者の移動手段は自動車(本人が運転、あるいは家族が運転)、自転車、徒歩が主であったと述べている。このことは、玄関から店先までの移動を可能にし、歩行といった移動能力を最小限にとどめるため運動の機会を減少させていることを示している。

第4に農作業における身体への負荷の大きさは、安静時を1とすると、場合によっては8倍にもなる(表2)ことがある。様々な機械が導入されている農作業だが、大西(2007)は「軽作業」においても「手指・腕・肩・頸・背中・腰」などの身体部位に疲労症状が多く訴えられていると述べている。それは小林(2010)が野菜や果樹などの栽培現場では中腰、前屈、上向きなどのつらい作業姿勢は改善されていないと指摘していることからわかる。これらは、腰背部や肩部、頸部への負荷であり、前述の身体部位の疲労症状が示唆される。

以上のことより本研究の対象者の属性をみて



図表 5 身体的 QOL (男性)



図表 6 身体的 QOL (女性)

みると、60歳以上が14名 (50%)、農業従事者7名 (25%) ということから痛みや不快感、医薬品や医療への依存、移動能力を問う項目の値が低くなつたと推察される。これらの改善のためには、筋力や関節の機能低下を防ぐため、長

時間同じ姿勢を取らないために適度な運動 (ストレッチや軽い歩行) の実施と一定時間の作業後の休憩が必要だといえる。

表2 身体活動のエクササイズ数表

メッツ ^{注2)}	活動内容 (農作業)	活動内容 (スポーツなど)
1.0	静かに座る、車に乗る	
1.5	運転	
2.0	立位での荷造り	ゆっくりした歩行
2.5	収穫機の運転、干し草の刈り取り、灌漑の仕事	ストレッチ、ヨガ、キャッチボール
3.0	車の荷物の積み下ろし	普通歩行、バレーボール
3.5	箱詰め作業、軽い荷物運び	ゴルフ (カート移動)
4.0		卓球、アクアビクス、太極拳
4.5	苗木の植栽、草むしり、耕作、家畜に餌を与える	バドミントン
5.0		野球、ソフトボール
5.5	電気芝刈り機を使う	
6.0		バスケットボール、ジャズダンス
7.0		ジョギング、サッカー、テニス、
8.0	重い物の運搬、干し草をまとめる 納屋の掃除、鶏の世話	階段を上がる、サイクリング、 ランニング (時速 8 km/h)

注1) 健康づくりのための運動指針2006から抜粋して作成

注2) メッツとは、身体活動の強さを安静時の何倍に相当するかで表す単位である。

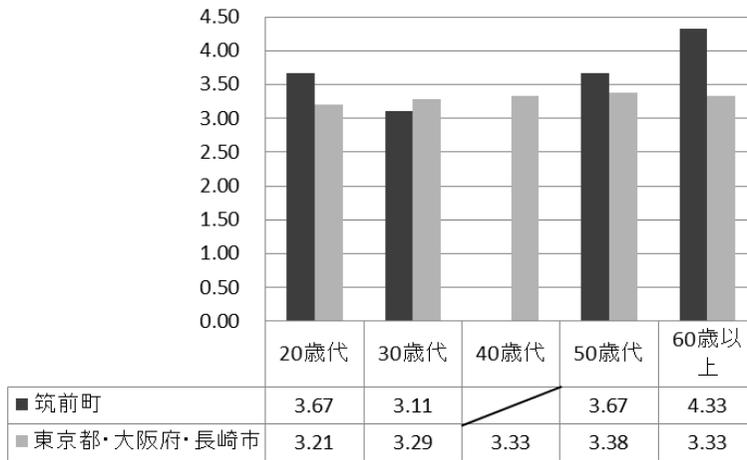
3. 心理的領域 (Q5、Q6、Q7、Q11、Q19、Q26)

心理的領域の平均値は 3.67 ± 0.57 であり、各年齢の平均値は図表7および図表8のとおりである。本研究の対象者は男性では20歳代の男性および60歳以上、女性では20・30歳代において、中根ら(1999)の値を上回っていることがわかった。心理的領域は自己肯定感や自己効力感、自己信頼感、セルフエステームに関する項目である。川畑(1997)は自己効力感とは自己に認知した効力期待のことを指し、実際の行動の実行を予測する要因であり、セルフエステームとは自分自身をどう感じているかということであると述べている。つまり、自尊心や自尊感情、自己評価ともいわれる。自分が価値ある存在と感じたり、自分に対して肯定的な感情を持っていたりする場合、セルフエステームが高いといえ

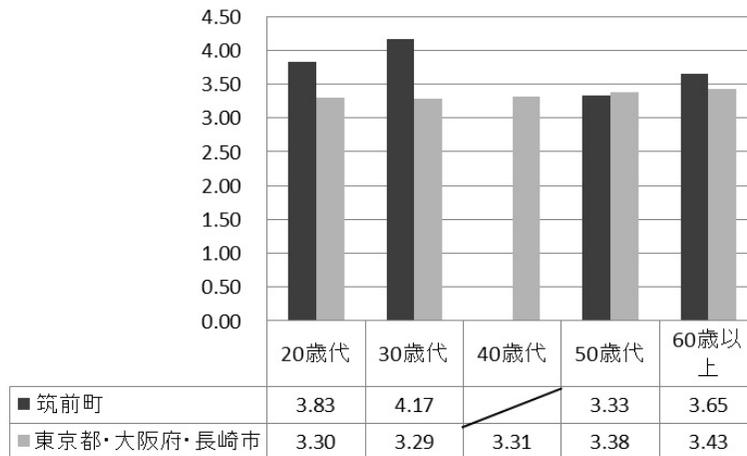
る。よって、心理的領域を具体的には以下の2点から検討することができるだろう。

第1に生きがいを持っていることが挙げられる。生きがいとは仕事、趣味やスポーツ、社会奉仕活動、生涯学習活動、さらに、他人や社会に役立っているという意識、達成感など様々な事項が挙げられる。金子(2006)は高齢者の生きがい活動について、実施者は性差、年齢階層に関係なく非実施者に比べ生活の満足において良好な状態であったと報告している。

第2に60歳以上の者においては、自分自身を年齢による「年老いた」「人生の黄昏の時期にいる」といったマイナスイメージで認識することなく、幸福感やゆとり感、積極性を持っていることが考えられる。福本ら(2009)は、活動性や知識吸収への意欲をもった高齢者集団は主観的高齢感が低いことを認めている。また、国



図表 7 心理的 QOL (男性)



図表 8 心理的 QOL (女性)

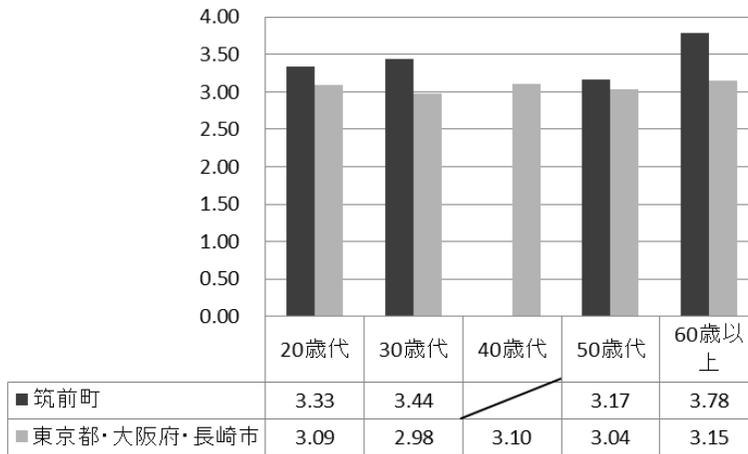
民生活に関する世論調査 (2012) において60歳代、70歳代は仕事について「社会の一員として、務めを果たすために働く」、「生きがいを見つけるために働く」という意識をもっているとしている。

以上のことより本研究の対象者は健康教室、その内容が健康体操への参加ということから、積極性、活発な傾向があるといえる。加えて、

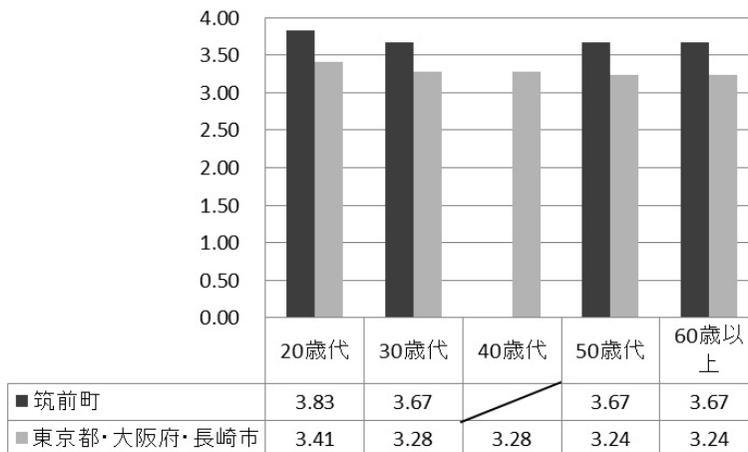
60歳以上であっても多くの人になんらかの職業に従事していることにより、セルフエスチームが高い傾向にあると推察される。

4. 社会的関係 (Q20、Q21、Q22)

社会的領域の平均値は 3.55 ± 0.35 であり、各年齢の平均値は図表 9 および図表10のとおりである。男女・各年齢をみても、いずれも中



図表 9 社会的 QOL (男性)



図表10 社会的 QOL (女性)

根ら (1999) の値を上回っていることがわかった。社会的領域は人間関係や友人・家族の支援の状況を示しているため、次の点から検討することができるだろう。

周囲の人との交流があるということが挙げられる。村上ら (1995) や金子 (2006) は生きがい活動実施者において、年齢層や性別に関係なく「健康・体力維持」、「友人との交流」、「家族の理解・協力」があることが活動継続の要因で

あると述べている。生きがい活動は地域クラブへの参加や親しい友人との活動などを指し、地域社会とつながる機会であるといえる。

以上のことより本研究の対象者は、地域社会や家庭において良好な社会性を持っていることがうかがえる。ただし、今回は家族構成や地域活動などは質問項目として設定していなかったため、検証については今後の課題とする。

5. 環境領域 (Q8、Q9、Q12、Q13、Q14、Q23、Q24、Q25)

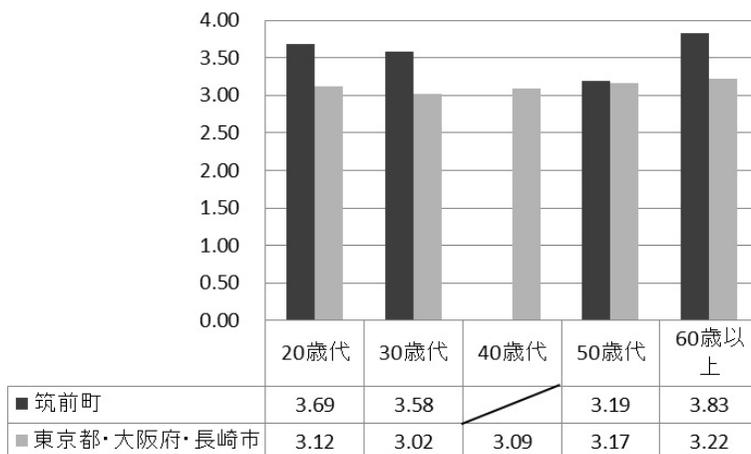
社会的領域の平均値は 3.55 ± 0.44 であり、各年齢の平均値は図表11および図表12のとおりである。男女・各年齢をみてみると、いずれも中根ら (1999) の値を上回っていることがわかった。環境領域は余暇活動の機会や居住環境・交通手段の充実などに関する項目であり、生活のしやすさを示していることから、以下の4点から検討することができるだろう。

第1に公共施設 (行政・医療など) が充実していることが挙げられる。筑前町役場および筑前町役場支所は国道386号線沿いにあり、それぞれ周囲にはホールや図書館がある複合施設や農産物直売所、学校、交番を有している。複合施設について具体的にみてみると筑前町役場はコスモプラザという生涯学習館、保健館、福祉館、敬老館の複合施設、図書館を併設して館内の移動を容易にしている。筑前町役場支所にはめくばーという町民ホールや図書館、健康福祉館などの複合施設、子ども未来館、女性センターが集約されている。さらに、筑前町は国立夜須高原青少年自然の家や夜須高原記念の森などの野外活動の場、町民プールなどがある。

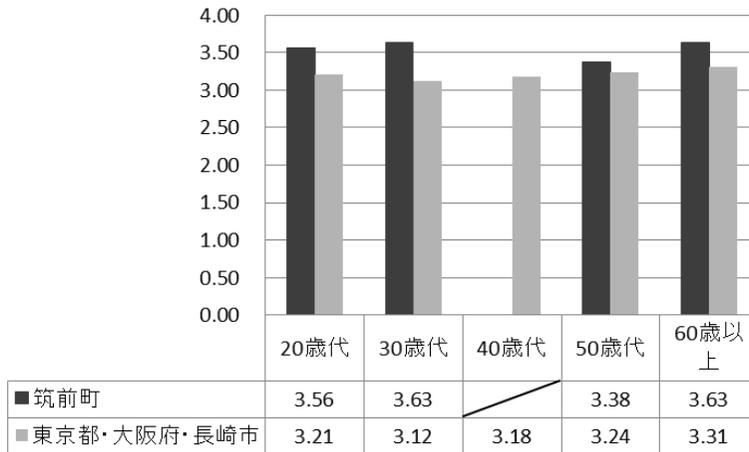
これらのことから、文化的、体育的余暇活動を実践する場は提供されているといえる。ただし、美術館や博物館、映画館などは隣接する久留米市や福岡市まで出かける必要があり、交通の利便性に寄るところが大きいだろう。

第2に地域のイベント (祭り、地域活動など) が行われており、参加できることが挙げられる。農業地帯にある筑前町は、食や農にかかわる住民も多く、関連のイベントも多いと考えられる。実際、筑前町では名産の黒大豆のPRと商品販促のために10月から12月にかけて「筑前クロダマルスタンプラリー」、11月には秋の収穫祭として「ど〜んとかがし祭」、年間をとおして行われるマンスリーコンサートなどが町のイベントとして開催されている。さらに、町内のコスモス畑やヒマワリ畑を活用した観光イベント、町内に5ヶ所にある農産物直売所で随時行われるイベントなど、誰でも参加できるものが開催されている。

第3に必要なものを購入すること (金銭関係、各種店舗など) が困難でないことが挙げられる。農産物直売所は農産物だけでなく、手工芸品も持ち込んで販売が可能である。このことは、高齢者でも収入を得ることを可能にしている。音



図表11 環境的 QOL (男性)



図表12 環境的 QOL (女性)

表13 WHO-QOL26の項目

	質問項目	領域	下位項目	筑前町	東京都 大阪府 長崎市
Q1	あなたの生活の質	全体的なQOL	-	3.26	3.18
Q2	あなたの健康状態	全体的な健康状態	-	3.29	3.03
Q3	痛みや不快感による制限	身体的領域	痛みと不快	3.71	4.05
Q4	医療や治療の必要	身体的領域	医薬品と医療への依存	3.93	4.04
Q5	楽しい生活	心理的領域	肯定的感情	3.67	3.31
Q6	意味のある生活	心理的領域	精神性・宗教・信念	3.81	3.43
Q7	物事への集中	心理的領域	思考・学習・記憶・集中力	3.93	3.50
Q8	生活の安全	環境領域	自由・安全と治安	4.00	3.55
Q9	健康的な生活	環境領域	生活圏の環境	3.71	3.31
Q10	生活の活力	身体的領域	活力と疲労	3.68	3.60
Q11	自身の外見を容認すること	心理的領域	ボディ・イメージ	3.36	3.06
Q12	必要な物を買うお金	環境領域	金銭関係	3.07	2.78
Q13	必要な情報	環境領域	新しい情報・技術の獲得の機会	3.46	3.25
Q14	余暇を楽しむ機会	環境領域	余暇活動への参加と機会	3.22	3.08
Q15	家の周りを出歩くこと	身体的領域	移動能力	3.14	3.33
Q16	満足な睡眠	身体的領域	睡眠と休養	3.54	3.12
Q17	やり遂げる能力	身体的領域	日常生活動作	3.61	3.18
Q18	仕事をやる能力	身体的領域	仕事の能力	3.61	3.16
Q19	自分自身に満足	心理的領域	自己評価	3.39	3.05
Q20	人間関係に満足	社会的関係	人間関係	3.70	3.22
Q21	性生活に満足	社会的関係	性的活動	3.11	2.93
Q22	友人の支え	社会的関係	社会的支え	3.79	3.44
Q23	家や周辺の環境	環境領域	居住環境	3.79	3.18
Q24	医療施設や福祉サービス	環境領域	健康と社会的ケア・利用のしやすさと質	3.41	2.84
Q25	周辺の交通の便	環境領域	交通手段	3.39	3.40
Q26	絶望、不安、落ち込み、嫌な気分	心理的領域	否定的感情	3.79	3.61

成 (2010) は農産物直売所が高齢者にとって「自分で値段をつけられる」「経済的に豊かになった」という経済的自立を促していると報告した。村上ら (1995) は健康感・経済状況が良ければ外出行動・家庭内行動ともに増加したという結果を報告している。

第4に道路の整備や交通手段が十分にあることが挙げられる。公共施設や医療機関が集約された立地にあることから、交通の利便性を向上させるための国道以外の道路や交通手段の充実が重要であるといえる。筑前町には福岡県筑紫野市から大分県日田市を結ぶ国道386号線があり、国道3号線にも通じる道路となっている。高速道路の朝倉インターチェンジ・甘木インターチェンジ・杷木インターチェンジなどにも接続が可能である。町内の公共交通機関の一つであるバスは民間バスが4系統、加えて筑前町福祉バスが走っている。鉄道に関しては、JR九州筑豊線や第3セクター方式の甘木鉄道、西鉄電車などはバスから乗り換えての利用となる。これらのことから、充実した道路網のあることが筑前町にとっては重要であると考えられる。

以上のことより本研究の対象者にとって、筑前町の環境はほぼ満足できるものであるといえるのではないだろうか。ただし、今回の調査では普段の生活における道路事情や交通手段、買い物の利便性などは明らかにできなかったことが課題である。

IV. まとめ

QOLの向上・維持は健康で豊かな生活を送るためには重要である。本調査は筑前町「食と健康と町づくりの研修会」に参加した住民を対象に、QOLの実態を明らかにする目的で行った。その結果、身体的領域のQOLがやや低い値となったものの、総合的なQOL、全体的な健康状態、心理的領域、社会的関係、環境領域においては良好な状況にある値を得ることができた。筑前町は福岡都市圏に近く、幅広い年齢

層で、3世代世帯も少なくないという環境に恵まれていることから、住民にとって住みやすい町となっているのだろう。

今後は調査対象者数を増やすとともに、普段の生活についてのより細かい項目を設定することで、さらに町づくりに活用できる調査を行う必要がある。

V. 謝辞

筑前町「食と健康と町づくりの研修会【ながら運動で健康アップ!】」の参加者の皆様、ならびに、筑前町役場の皆様には、快く本調査にご協力いただきありがとうございました。

VI. 文献

- 福本安甫・田中睦英・押川武志, 主観的高齢感とQOLとの関連, 川崎医療福祉学会誌 Vol.18 No.2, pp.433-438, 2009.
- 川畑徹朗・西岡伸紀ほか監訳, 『WHO・ライフスキル教育プログラム』, pp.19-20, 1997.
- 金子勝司, M町における高齢者の生きがい活動の実態と今後の方向性について, 共栄学園短期大学研究紀要第22号, pp.103-117, 2006
- 小林 恭, 農作業安全と快適作業について, 日本機械学会誌, vol.113, pp.13-16, 2010.
- 厚生労働省, 平成21年度国民医療費の概況
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-iryohi/09/index.html> (2012.9.5閲覧)
- 文部科学省, 平成22年度全国体力・運動能力・運動習慣等調査結果
http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/kodomo/zencyo/1300107.htm (2012.9.5閲覧)
- 村上明美・川越清子ほか, 都市における高齢者のQOL (3) - 生きがい活動と主観的幸福感との関連 -, 神戸市立看護短期大学紀要第14号, pp.141-152, 1995.
- 中根允文・田崎美弥子・宮岡悦良, 一般人口におけるQOLスコアの分布 - WHOQOLを利用して -, 医療と社会 9(1), pp.123-131, 1999.
- 内閣府, 平成24年度国民生活に関する世論調査
<http://www8.cao.go.jp/survey/h24/h24-life/index.html> (2012.10.22閲覧)
- 大西徳明, 労働形態の変化にみる労働負担と健康,

東京農大農学集報 51(4), pp.155-166, 2007.
音成陽子, 農産物出荷者の健康と地域に関する認識 - 福岡県の直販所を事例として -, 流通科学研究第 9 巻第 2 号, pp.1-8, 2010.
総務省統計局, 平成22年国勢調査, <http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2010/index.htm> (2012.8.23閲覧)
田崎美弥子・中根允文, 『WHOQOL26手引 改訂版』, 金子書房, 1997年.
田村英美, 地方圏における交通手段の社会学的検討, 福岡県立大学人間社会学部紀要 vol.20(2), pp.59-72, 2011.

筑前町 HP, <http://www.town.chikuzen.fukuoka.jp/index.htm> (2012.10.30閲覧)
筑前町「町民憲章」<http://www.town.chikuzen.fukuoka.jp/432.htm> より
運動所要量・運動指針の策定検討会, 健康づくりのための運動指針2006～生活習慣予防のために～<エクササイズガイド2006>, 厚生労働省, pp.5-36, 2006年
全国町村会2573号(2006年9月11日)「町村のとりくみ」
<http://www.zck.or.jp/forum/forum/2573/2573.htm> (2012.8.23閲覧)